

Title	明治初年に於ける福澤諭吉の一面：九鬼家所傳福澤資料解説
Sub Title	One phase of Fukuzawa in the early years of Meiji : notes on Fukuzawa material in Kuki household
Author	富田, 正文(Tomita, Masafumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.2/3 (1954. 5) ,p.251(349)- 274(372)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾史研究特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0251

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治初年に於ける福澤諭吉の一面

——九鬼家所傳福澤資料解説——

富 田 正 文

は し が き

慶應義塾圖書館で、本年初頭に入手した福澤資料の中に、舊攝州三田藩主九鬼家に傳はつてゐた福澤書翰十七點および附屬書類若干がある。

これは従來世に知られてゐなかつた新資料であるばかりでなく、福澤と三田藩主九鬼隆義との交情を物語る資料でもあり、また明治二年から六年頃まで——即ち慶應義塾の三田へ移轉の前後——從來やゝ資料の不足してゐる年代のものであり、且つその内容が事務的なものでなく、福澤の内面生活の發展過程を窺ふに足りる文言が多い。福澤の著述上の態度は明治五年二月「學問のすゝめ」初編を以て一轉機を示してゐるが、九鬼家所傳資料は、福澤の思想が「學問のすゝめ」に結晶して行く過程をかなり明瞭に示すものである。その意味に於て、この一連の資料は、福澤關係資料の中で特異な重要性を持つものである。茲にその全資料を公けにする當り、これを中心として、その當時の福澤の思想行實の

跡を辿つてみたいと思ふ。

九鬼隆義と福澤との交情

九鬼家所傳の福澤資料は、明治二年十一月六日より同六年十月十一日附に至る福澤書翰十六通、年代不明五月二十一日附の福澤書翰一通、同封福澤自筆の書類（勘定書、送り狀など）三通、福澤の文章の寫本一冊、外に早矢仕有的の福澤宛書翰三通、九鬼隆一より福澤宛書翰一通より成る。

右の十七通の書翰は舊攝州三田藩主九鬼隆義宛のもので、その中には直接に九鬼宛のものでなくその側近の用人宛のものもあるが、いづれもその内容は九鬼へ宛てたものと解釋して差支へない。

九鬼隆義は、安政六年十一月に攝州三田藩三萬六千石を襲封した。幕末に際し江戸城中に在つて主戰論を主張し、儕輩の諸藩主をリードして將に起たうとしたが、藩士白洲退藏の極諫により翻意し、西軍に屬して藩の運命を轉回するこゝとが出来たといふ。これによつて考へると、年少氣鋭で有爲の材を懷いてゐた人物のやうに思はれる。

この九鬼と福澤とが如何にして交はりを結ぶやうになつたのかは明らかでないが、九鬼家の侍醫に幕末の蘭學者川本幸民が居るから、川本と福澤との交際から、自然にその藩主と近づきになる機會があつたのではあるまいか。少くとも明治二年頃には、九鬼が東京へ出て來ればしばしば福澤を訪問し、福澤も九鬼を訪ね、九鬼からは藩に洋學校を設立したい考で相談を持ちかけ、また洋書や器械類の外國からの取寄せ方を福澤に依頼してゐる。福澤はその頃、横濱で丸屋善八といふ店を開業させた門下の早矢仕有的に命じて、三田藩の註文品の調達を取計はせてゐる。

この三田藩の洋學校は、領民の騷擾やその他の事情があつて實現が延び／＼になつた様子であるが、その後福澤は明治三年と明治五年とに中津に赴いたが、その途中で京阪通行の際に九鬼に面會し種々手厚い待遇を受けてゐる。また明治六年頃には、九鬼の一族と思はれる「おあいさま」と呼ばれる女性が、福澤の家に居たらしく、福澤が子供たちの世話になつてゐる禮を述べてゐることもあり、家臣の九鬼隆一を福澤の門に入らしめ、また九鬼家の家宰を勤めてゐた白洲退藏と福澤との交はりなどを思ひ合はせると、九鬼と福澤との交情はよほど深かつたものと見て差支えないと思はれる。

學問教育の事に就て

九鬼隆義の企圖した三田藩の洋學校は、領民の騷擾事件その他のために、容易に實現を見るに至らなかつたが、福澤はその間、或は勵まし或は慰め、さまざまの手紙を送つてゐるが、その文面から、その當時の福澤の教育觀を窺ふことができる。

洋學校御取建被成候はゞ、治人の君子を御引立相成候より爲人治の小人を導き候よふ御注意被遊度、方今世の中には治國の君子乏しきにあらず、唯缺典は良政府の下に立ち良政府の德澤を蒙るへき人民の乏しきなり。下よりこれを求めされは上よりこれを施さざるも亦宜なり。災害下より起れば幸福も亦下より生せん。小民の教育專一と奉存候（書翰第一）

明治二年のこの手紙では、人に治められる小人を導いて良政府の下に立つ良民たらしめるのが大切であるといつてゐる。

るが、明治七年一月の「學問のすゝめ」第四編に於ては「學者の職分を論ず」と題して、人民と政府と並び立ち互に相助けて國家の獨立を維持すべきことを力説し、更に明治九年に福澤の起草した「慶應義塾改革の議案」に於ては「我慶應義塾の本旨は、人の上に立て人を治るの道を學ぶに非ず、又人の下に立て人に治めらるゝの道を學ぶに非ず、正に社會の義務を盡さんとするものなれば云々」と記すに至つた。二年から九年までの間に福澤の教育上の理想と有識者の社會的在り方についての觀念が、漸次に明確な形をとゞのへて結晶して行く過程を窺ふことができる。

人を勧るは自から先んずるに若ず。御領内に學校御開き相成候はゞ、閣下御自身にて讀書御勉強奉祈候。或は御閑暇の節は經濟論脩身論の講義御聽聞被成度、其佳境に至ては殆んど眠食を忘れ候程面白きものに御座候。一身の獨立一家に及び、一家の獨立一國に及び、始て我日本も獨立の勢を成し可申、所謂報國盡忠とは是等の事にも可有之哉に愚考仕候（書翰第二）

後年福澤は、始めて經濟學に接したときのことを回想して、「每章每句耳目に新ならざるものなく、絶妙の文法、新奇の議論、心魂を驚破して食を忘るゝに至れり」（正全集第四卷五七八頁）と述べてゐるが、この言葉が決して回想の誇張でなかつたことを、この手紙が立證してゐる。殊に新時代の報國盡忠の道は、國家の獨立を以て最第一とするが、これを達成するには先づ國民個々の獨立を遂げしめることが先決問題で、獨立の個人によつて獨立の一家を成し、獨立の一家を結集して國家の獨立に到達するといふ順序は、從來福澤の書いたものでは、「中津留別之書」に「一身獨立して一家獨立し、一家獨立して一國獨立し、一國獨立して天下も獨立すべし」とあるのを最初として、「學問のすゝめ」第三編「一身獨立して一國獨立する事」などに展開されてゐるのを知つてゐたが、そのプロトタイプを、この書翰の中に見

出すことができる。

舊冬は御領民騷擾いたし候由、御心配の段奉恐察候。如高命日本の愚民は亂を起すこと極て拙なり。先年御在府中にも被爲入候哉、都下に貧窮組紙のぼりと申事有之、彼等の舉動は大抵是等の拙策に出候義、無知無學の致す處、如何ともすべからず。今此貧民を救はんの策は、金を與るよりも智慧を附與する方可然哉に奉存候（書翰第三）

これ亦數年の後「學問のすゝめ」初編の末段に於て更に明確に論述されてゐる考え方である。更に愚民に智慧を附與するには己れみづから學問をせねばならぬことを強調し、洋學の重要性を説く。

人に智慧を附するには先づ自から知識、此文字譯書中にも往々有之候得共甚不當なり、見聞と譯する方可然を研くに若かず、知識を研き見聞を博くす

るには書を讀むを專一とす。書を讀むは横文字に若くものなし。世の譯書は見るに足らず、見る可き者あるも甚だ少し。原書壹枚を譯するには二十枚を讀むの時刻を費す。譯書の少き所以なり。其御地には川本氏あり。閣下も必ず

原書御研究の御義に可有御座、吳々も御勉強奉祈候（書翰第三）

こゝにいふ川本氏とは川本幸民のことであらうと思はれる。川本幸民は九鬼家の侍醫の家に生れ、坪井信道の門に學んだ蘭醫で、幕府の蕃書調所教授であつた。福澤の最初の譯書「華英通語」に、福澤はみづから漢文の序文を書いたが、その時、皇國とか本邦とかいふ文字に闕字したのを心中ひそかに平らかならず、川本幸民に質したところ、その必要はないと教えられ、それ以後、自分の著書には斷じて闕字しないことにきめたといふことが、「福澤全集緒言」に記してある。福澤は「川本先生も洋學界自由思想の大家なれば云々」と敬意を拂つて書いてゐる。川本は維新後藩地三田に引籠つてゐた。福澤はこれに時々新舶來の洋書などを贈つてゐたものらしい。次に掲げる「モラルの小冊子」といふ

のは、固より書名は明らかでないが、文意より推せば、ウェーランドの「モラル・サイエンス」ではないかと思はれる。

先般モラルの小冊子、川本氏を呈し申候。御覽相成候よし。講義御聽聞被遊度、誠の道を求め一身を脩るの術は他に有之間敷、先づ人倫の大本を立候様いたし度、大本とは夫婦なり。世間に女大學と申者有之、婦人のみを罪人のよふに視做し、これを責ること甚しけれども、私の考には婦人を對しあまり氣の毒に御座候。何卒男大學と申ものを著し、男子を責候様いたし度、婦人を輕蔑するは東洋諸國の風俗、西洋人の侮を受る所以、事實世教に妨を爲すこと甚し。現に日本國中の小兒は兩親ありて半は孤子同様に御座候。可憐の甚しきなり。(書翰第二)

これは明治三年二月十五日附の書翰の一節であるが、これより九ヶ月の後、明治三年十一月二十七日附で福澤の書いた「中津留別之書」に「人倫の大本は夫婦なり」と冒頭して男女論を展開してゐる一節に非常によく似てゐることに注意を惹かれる。「母はあれどもなきが如く、孤子に異ならざるなり……哀といふも尚あまりあり」などの文言は、右の手紙と殆んど字句まで極似してゐる。更に「學問のすゝめ」第八編後段に於ける女大學三從七去說に對する攻撃、更に後年の婦人論、男子論、品行論、女大學に對する評論等が、既に早く明治二年のこの手紙の中に、その萌芽を示してゐるのに氣附くのである。

夫婦の論は姑く閣き、兎角一身の私を慎むこと專一と奉存候。我を脩めずして人を導んとし、我を忘れて人を鼓舞せんとすれば、人亦自から脩めずして我を鼓舞するならん。斯の如は則ち天下に他を鼓舞する者のみにて鼓舞せらるゝ者は一人も有之間敷、如何して全國の文明を期すべきや。(書翰第二)

これは、明らかにウェーランドである。「學問のすゝめ」第八編「我が心を以て他人の身を制す可らず」の材料とな

つたウェーランドの「モラル・サイエンス」の第二編 Of the Nature of Personal Liberty の所説が、そのまゝこの手紙の中に記されてゐると見てよい（「福澤諭吉の人と思想」昭和十五年、岩波書店、六五―七六頁参照）。

明治三年四月二十五日附の書翰には「先般不圖存付、學校之説相認申候。草稿さし上候間、御一覽の上御評論奉願候云々」と記してある。その「學校之説」の自筆草稿は遺つてゐないが、幸に寫本があつた。この寫本は「慶應義塾之記」と「中元祝酒之記」と、この「學校之説」とを併せて一冊としたものであるが、他の二つは既に知られてゐるものであるから、今回は「學校之説」だけを紹介しておく。（「學校之説」の寫本は別に慶應義塾圖書館所藏の一本があるが、本誌には九鬼家所傳の寫本を掲げた。兩寫本の間には多少の異同があるが、九鬼家本の方がすぐれている。）

福澤は官私學校の得失を各々數ヶ條擧げて、結局「官學校ハ教育入用の財アレトモ此財ヲ以テ人ヲ教ユルノ術ニ乏シ私學校ハ人ヲ教ヘテ世ノ裨益ヲ成スヘキ術ニ富ト雖モ此術ヲ實地ニ施スヘキ財ニ貧ナリ」と歎じ、最後に最も望ましい形態として、「財ヲ有スルモノハ財ヲ費シ學識ヲ有スル者ハ才力ヲ盡シ世ノ便利ヲ達スルニアリ」といつて、政府から獨立した財團法人のやうな組織による學校形態を、おぼろ氣ながら描いてゐたのは、注目に値すると思はれる。學問教育の事業を政府から獨立せしめ民間有志者の財力と學識との協力によつて維持發展せしめようとの構想は、福澤に於ては生涯を通じて變らなかつたやうである。「學校之説」の末尾に附してある「洋學之順序」は、「慶應義塾新議」の中に述べてゐる「義塾讀書の順序」と、ほゞ同じ趣旨で、新議よりもやゝ詳細になつてゐる（續福澤全集第七卷七三頁参照）。新議は明治二年八月附で新錢座慶應義塾に汐留分塾の設けられたときのアナウンスメントであるが、「學校之説」はそれより約半歳の後の執筆に係り、福澤の教育事業に關する構想を取纏めたものと見てよいであらう。

腸チフスの經過について

福澤は大阪緒方塾の在學中、安政三年二十三歳の三月に同窓生岸直輔の腸チフスを看病してこれに感染し、緒方洪庵の親身の診療によつて、辛うじて癒えた。それから十四年の後、明治三年三十七歳の五月、再び腸チフスに罹り、九死一生の危機を幸にして脱することができた。

石河幹明著「福澤諭吉傳」の記すところによれば、五月五日の夜、福澤は子供達を連れて三田の有馬の水天宮の緣日に行き、歸宅の後ひどく寒む氣がするといつて床に就いたが、遂に發熱して腸チフスの症状を呈し、非常な重症で、隈川宗悦が主治醫となり、塾にゐた近藤良薫、土屋拙齋、安藤正胤等が助手として治療に當つた。福澤の學友中には醫者が多かつたから、當時著名なる大家を洩れなく呼び迎へて診察せしめ、その中にはドクトル・シモンズも居たといふことである。

この五月五日の夜から病床についたといふ説は、少しく疑ふべき節がある。福澤は五月七日附で長岡に居た藤野善藏宛に相當長文の手紙をやつてゐる。その文面は、惡寒發熱中の病人が書いたとは受け取れないほど、綿密詳細に慶應義塾の近狀について述べてゐる(續全集第六卷五九二頁)。

ところが、病の癒えてから九鬼隆義に贈つた明治三年十月十四日附の書翰によると、病氣の經過と治療に當つた醫師の名が、右の所記とは少しく違つてゐる。

當五月中旬より惡症の熱病に罹り、五月廿日頃より六月七八日までの間は人事不省、五月晦日頃は迎も生路も無

之模様は御座候處、醫藥の功を奏し幸に今日の全快に及候次第に御座候。假に三四年前此大患に罹候義も御座候は、萬々全快を望むべきにあらず候得共、今日此都下に居り、此良醫の治療を蒙り、此良友の介抱を受け、始て此全快を取り候義、所謝は醫師と社中の朋友に御座候。醫師はアメリカ人セメンズ英人ウエルス兩人を頼み、療法頗る新奇、日本の醫師は伊東玄伯、石井謙道、島村鼎甫、隈川宗悦、此外に横濱の友醫早矢仕有的、専ら苦心いたし吳、先づ日本にては最上の治療を施し候事に御座候（書翰第六）

とある。セメンズは前記シモンズで、日本人の間ではセメンズと呼ばれてゐた。驅蟲劑セメン圓はこの人の處方によりその名を冠せられたと傳へられてゐる。英人ウエルスとは如何なる人物であるか。私はまだこれを詳かにしない。伊東玄伯は、伊東玄朴の養子で、オランダ歸りの新進の蘭醫であつた。後に侍醫兼宮中顧問官になつた伊東方成である。石井島村は大阪緒方塾以來の福澤の學友、隈川はシモンズの門人で福澤と親交があつた。早矢仕有的は福澤門下の醫師で横濱で丸善を創業したが、傍ら醫業にも従事してゐた。

私義發病より今日まで丁度百五十日に相成候得共、今以讀書の氣力無御座、未だ嚴冬にも至らず、早既に寒氣に恐れ、フラネルに體を包み閉居仕居候位の次第、御憐察可被成下候（書翰第六）

この一節により發病の日を正確に算出できる。この頃は太陰曆で日を繰るのが面倒であるが、當時の曆日で逆算すると、十月十四日から百五十日前は五月十三日に當る。すなわち前記「福澤諭吉傳」所記の五月五日の夜から發熱したといふ説も、この手紙の冒頭の「當五月中旬」といふ漠然とした記述も、正確には五月十三日と斷定することができる。

「福翁自傳」にこの頃のことを回想して、「横濱の友醫ドクトルシモンズの説に、何でも肌に着くものはフラネルに

せよと云ふから、シャツも股引もフラネルで拵へ、足袋の裏にもフラネルを着けさせて全身を纏ふて居た所が、頓と効能が見えぬ」ので、遂に日本流の木綿の襦絆に改めたことが記してあるが、この手紙はそのことを立證してゐる。この時、福澤はフラネルを求めたけれども容易に手に入らず、遂に横濱で紫のフラネルを入手し、シャツも股引も紫のものを着けてゐたと傳へられてゐる。

九月初旬の比、一友醫の説に従ひ、熱海の湯治思立、家内一同召連れ、先方へ二週間滞留、當月十日歸府仕候
(書翰第六)

この熱海行の途中で、福澤夫人が危禍に遭つた事件がある。それは湯河原附近の門川といふ所で、川に渡した獨木橋を渡るとき、突然強い風に煽られて夫人が河中に轉落した。荷物の宰領に伴つて行つた男が、早速飛び込んで、夫人を援け起したが、起つてみたら案外淺い所であつたので、一同失笑したといふ。明治十七年六月、福澤は夫妻同伴で熱海温泉に遊び、昔の事件を思ひ出して、アメリカにゐた長子一太郎に「一昨日小田原より熱海の間にて、例の門川も通行、母人半溺の舊跡、依然として十五年前の如し。數年大丈夫なる橋出來、人力車にて通行いたし候」(愛兒への手紙「八五頁」と報じてゐる。

毎日肉食牛乳等相用、養生のみに心掛居候。病中より牛馬の會社と頻に懇意相成、其主人の需に應し、肉食之說相認遣し候。病後執筆、極て拙劣に御座候得共、數冊拜呈仕、御一笑に供し候(書翰第六)

この「肉食之說」は築地牛馬會社のために書いて與へたもので、同社の製品の廣告引札として印刷頒布せられた(續全集第七卷三八五頁)。頗る奇拔な筆鋒で肉食の大切なことを説いた戯文めいたものである。

福澤は、この病後、氣力のまだ十分に恢復しない間に、後に記すやうに慶應義塾の移轉を企圖して、岩倉具視に初めて面會してゐるし、また仙臺藩士大童信太夫等の助命のために奔走してゐる。

中津より母を東京に迎ふ

福澤は、明治改元の直前に幕府を退身し、新政府の召命をも固く辭退し、「讀書渡世の一小民」となるの覺悟を定め、幕府退身の後久しからずして中津藩から受けてゐた扶持米をも辭するの意を明かにし、中津に居る老母を東京に呼び迎へて一緒に住むことを希望し、明治二年四月頃から度々人を派して母の出京を促したが、母は容易にこれを肯んじなかつた。

福澤は明治三年に入ると、自分で中津へ出向かうと考へてゐた（書翰第二）が、多忙に取紛れて日を過してゐるうちに、腸チフスに罹つて、遂に病氣恢復の後に漸く素志を實現するの運びとなつた。塾生中上川彦次郎、海老名晋の兩名を伴つて、十月二十八日に江戸を出て、横濱からアメリカ船に乗つて十一月二日朝神戸に上陸、長門屋彌兵衛方で小憩、直ちに大阪に赴いた（書翰第七）。大阪では中津藩倉屋敷内の長屋鮫屋彦兵衛方に落ち着いた（書翰第八）。

石河幹明著「福澤諭吉傳」では、この時たゞく大阪に出て來てゐた親戚の藤本箭山方に逗留したといふのであるが、藤本の來てゐた家が右の鮫屋彦兵衛方であつたのか、或は手紙などを受取る便宜上、鮫屋の名を假に使つたのであるか、その邊は明らかでない。

福澤は、着阪の翌日、緒方塾の同窓山口良藏とその父寛齋とを訪問し（續全集第六卷五〇七頁）、數日間滯在中、「西洋

事情」や「西洋旅案内」の偽版探索をしたり、緒方洪庵夫人を訪問したり、紀州出身の舊門人草郷清四郎や、松山棟庵等に面會したりして、十一日に大阪を出發、蒸汽船で中津に赴いた(「福澤諭吉傳」第一卷六七二頁)。

中津滯留の日數は正確にはわからないが、十數日のことに過ぎなかつたやうである。十一月二十七日の夜、「中津留守居町の舊宅敗窓の下に記」した「中津留別之書」の中に、「發足の期近きにあり」と記してある。福澤は久しぶりで母に面會し、これを説いて遂に東京へ移住することを承諾させ、兄三之助の遺兒おいちをも伴なひ、母を奉じて東京への歸途に就いた。最近中津市立圖書館長今永正樹氏の作つた「福澤先生年譜」に據ると、福澤はこの時、中津の宅を親戚の渡邊彌一に買取つて貰つたといふことである。

歸途は備後の鞆の港に着き、福山に四五日滯留の後(「福澤諭吉傳」第一卷六七二頁)、神戸に着き、母を神戸の旅宿に残して單身大阪へ出たのが十二月十三日であつた(「書翰第九」)。この時の福山滯在は、同藩が三田藩同様に學事の改革を企て福澤に相談をかけ、また福澤の著譯書を教科書に使用してゐたといふ事情もあり、また同藩から編纂費を援けられてゐた國語辭典編纂の仕事の進行中であつたので(この辭典編纂は廢藩のため未完成のまま中絶した)、それらの用事を兼ねて同地の要人と會談するためであつたと思はれる(「福澤諭吉傳」第二卷二七一頁參照)。この時の大阪到着は、當時大阪でフランス語を學んでゐた飯田平作の談では、十二月十一日となつてゐるが(前掲書第一卷六七二頁)、十三日が正しいと思はれる(「書翰第九」)。大阪滯在は一兩日で直ちに神戸へ立戻り、十七日出帆のアメリカ船で十九日横濱着、即日馬車で東京に歸つた(「書翰第一〇」)。

暗殺の危険の裡に

福澤の中津行は、十月二十八日に出發して十二月十九日に歸京するまで約五十日の旅で、その間に大阪で九鬼隆義に面會し、中津の家の始末をつけ、母と姪とを伴つて歸途に就き、途中福山に立寄つたが、神戸へ着くや、直ちに最も近い便船によつて急遽東京へ戻るといふ、遽しい旅であつた。

兩三年前から容易に東上を肯んじなかつた母が、福澤の中津まで出向いての説得に應じて、俄かに東京移住を決心したことに就ては、一つには數ヶ月前に福澤が大病をして生死の境を彷徨したことも有力な原因と思はれるが、また一つには當時の事情に於て福澤の身邊に暗殺の危険が切迫してゐた事情をも考へ合はせねばならない。かういふ情勢の下に於て母子が東西隔絶の異域に居住してゐたのでは、或は團欒の樂をすることなしに遂に永別の機に遭ふやうなことになるらぬとは、何人も保證し得なかつたであらう。お互に命のあるうちに肉親親愛の生活を送りたいといふ考が、母子いづれの胸にもひそかに宿つてゐたのではあるまいか。

事實、この時の旅行では、福澤はみづから覺らなかつたけれども、大阪では朝吹英二に危く殺されようとし、中津では増田宋太郎に狙はれてゐたのである。神戸へ着いてみると、東京から身邊警戒の手紙が來てゐるといふ始末で、樂みにしてゐた母と共に上方見物の予定も切上けて、歸東を急がねばならなかつたのである。

道中も多事心配仕候義、母は今日神戸へ残し置、我壹人大阪迄罷越候事に付、明日歟明後日は神戸へ立歸、便船次第直に出帆の積に御座候。アメリカ船は十七日入帆のよしに候得共、其前にも好き蒸氣船有之候得は乗込候心得

に御座候。神戸と三田は里數も無御座、罷出度候得共、老人壹人にて私を手離し候義、甚不安心の様相見候に付、業と不背其意、先つ附添居候様仕度、遂に此度も參上仕兼候義、不惡御海容奉願候。中津出立の砌つまらぬ事を二、三葉相認、遺し候草稿反故、奉入御覽候。御一讀も被成下候は、難有奉存候。

江戸も騒々敷よし、同社中よりも戒心可仕旨、毎々申參、此度は京都へも一寸立寄候積に有之候處、右の次第ゆへ先つ見合申候。兎角一命丈けはたすかり度用心仕候(書翰第九書)

贈つた草稿といふのは「中津留別之書」であらう。かくして用心に用心を重ねて無事に東京まで歸り着いたが、果して年が明けると匂々に、廣澤參議の暗殺といふ事件が起り、市中の警戒は嚴重を極めたので、これが却つて福澤の一身の安全のためには好都合になつた。しかし外出の時などは萬一に備えて十分の用意を整へねばならなかつた。

舊臘十九日横濱着、東京の模様承合の處、さまで可恐にも無之に付、即日婦人小兒と共に馬車にて歸宅、途中も無難、先つ今日までは一命を不失罷在候。都下の景況、人の話よりも穩靜、本月九夜廣澤參議の暗殺より市中取締殊の外嚴重、昨今は暴客も少きよしに御座候。併社中の者も勉て用心仕、夜行等は見合、私も要用の外は他出不仕、出るときはパッチ麻裏アサツラにて、鳶口杯携、先つ兩三人の敵なれば此方より打倒し候積、足早に往來いたし居候。

扱々六ヶ敷世の中に御座候(書翰第一〇)

と歎息してゐる。

慶應義塾の三田移轉

新錢座移轉の前後、世事の變轉のために漸減した塾生は、維新變亂の收束すると共に漸くその數を増し、明治三年一月には

生徒は貳百名余、此内文典の素讀終り會讀等いたし候者百五十名斗に御座候（書翰第二）といふ景況になつた。福澤は教育と著譯の事に忙しくて、母の居る中津へ歸省したかつたが、容易にその暇が見出せない有様であつた。

兎角當處を離れ難く、一日を費せは一日の活計に差響き、不自由に御座候。一昨年より無位無祿相成、始て時日の貴きを覺へ申候。徒に讀書と生計とに忙しく風月の樂杯は何れへか忘却仕、不風流の極度、御一笑可被下候（書翰第二）

かくて、五月に福澤が腸チフスをわすらひ、病後新錢座の低濕の地であることを厭ひ、どこか山の手の高燥の場所へ移りたいと思ひ、かたく義塾の生徒も激増して塾舎が狹隘を告げたので、諸方面を物色してゐたことは、次の文言で知れる。

塾も手狭に困り、可然山の手の地に轉し度、頻に周旋仕居候得共、兎角埒明不申、困却に御座候。何分にも私塾は貧に苦み、不如意の事のみ御座候（書翰第六）

前記の如く、この病後氣力の十分に恢復しない間に、福澤は塾の移轉先獲得の運動のため、岩倉具視に初めて面會してゐる。この時、三田藩の洋學校設立の話なども話題に出たものと見え、次の如く報じてゐる。

江戸に居候節岩倉様を御目にかゝり、乍序其御藩の話しも仕、岩公の御口上にては誠に能き模様御座候。兼て

思召の學校案、自由自在との事に御座候(書翰第八)

中津の旅行から歸つてみると、不在中に三田島原藩邸拜借の願意が聞届けられてゐた。引越しのためには多少の費用もかゝる。教員に十分の手當も出せない次第であるが、その教員もまだ十分に羽も生え揃はない癖に月給の高いところへ飛んで行きたがる。それにつけても將來の日本全體の教育のことを思へば、學校の維持經營の形態は今から考へて置かねばならぬと、福澤は義塾の三田移轉に際し、次の如く述べてゐる。

舊冬留主中三田貳丁目元嶋原藩邸を官より拜借地被仰付、建物は八百兩程にて買取、此節普請、來月中引移の積り、學校は兼て申上候通り私立の塾に限候事に候得共、元金無之、此度の引越に付ても貳千七八百兩の入費、生徒より少々つゝの金を集候ても、普請の入用に費し、教授の者に分配すること甚少し。教授の者は世教を重んぜずして錢を重んじ、或は南校の月給を取らんとし、或は無知無識の大名に投し分外の金を取らんとし、私塾にて羽翼未だ形を成さずして早既に飛ぶ者多し。顧て南校東校等の有様を見るに、當時南校の生徒一千人、一歳の費用三十萬兩に下らず。生徒壹人に付三百兩の割合なり。全日本國の人口を四千萬と積り、學生其二十分の一なれば貳百萬人なり。是非貳百萬人の學生はなくて不叶事なるべし。然るに今南校の法を擴て全日本國に及ぼし、學生壹人に三百兩の金を費さば、貳百萬に三百を乘し六億兩なり。此金は何處より出候哉。迎も不被行話なり。故に曰、學校は公私中間の者に定め、學識ある者は才力を費し、金ある者は金を費し、双方互に相助て教化を廣くすべきなり。今日の有様にては、日本國中壹萬五千人より多くの洋學生は出來申間敷、迎も全國の文明は期すへからざる義と、長大息仕候事に御座候(書翰第一〇)

こゝでも前記「學校之説」の中に構想してゐるやうに、財力ある者と學識ある者との協力による「公私中間」の學校形態を思ひえがいてゐる。

明治五年の中津行

三田へ移轉のその年の始めに、中津藩主奥平昌邁が東京へ出て福澤の指導を受けることになつた。七月には廢藩置縣が行はれた。中津では舊藩士等の共同資金に加ふるに奥平家の出資を得て、洋學校を設立することとなり、十一月奥平昌邁の米國留學に先だつて開校のことが決し、初代校長として小幡篤次郎がこれに赴任し間もなく濱野定四郎と交代した。すなはち中津市學校がこれである。

福澤は、この學校を視察かたぐ、京阪神に遊び、舊三田藩主にも面會したいと考へて、今度はやゝゆつくりした旅行の計畫を立てた。すなはち明治五年四月一日横濱を出帆して三日に神戸到着、こんば金場常次郎方に一泊して、翌日大阪に出て、かわや町二丁目白金屋與次兵衛方に一兩日逗留、それから三田へ行つて九鬼隆義に面會、有馬の温泉にゆつくり逗留して、また大阪へ出て、都合によつては伊勢參宮もし、五月末になつて中津へ行かうとの心組であつた（書翰第一一）が、この時は伊勢參宮は遂に實現しなかつた。

「福翁自傳」に、緒方洪庵夫人を訪問して、夫人の好意で貸してくれた駕籠を釣らせて、大阪から三田へ行く途中、駕籠を降りてぶら／＼歩きの退屈しのぎに、通行人を相手に、士族の聲色を使つたり町人の眞似をしたりして、相手の反應を試みた話が出てゐるが、それはこの時の道中のことである。

十日に大阪を立つて三田へ行く途中、名鹽で一泊、三田では九鬼の歓迎を受けて數日逗留、手厚い待遇に接した(書翰一二)。それから十四日に有馬の溫泉に赴き、そふめんやといふ宿屋に逗留入湯中も、三田から種々食物などが贈られた模様である(書翰一二、一三)。

二十七日再び神戸に行き、五月一日早矢仕有的と同道して京都に赴き、同地の教育狀況を視察した。この視察の結果を記した「京都學校之記」は「五月六日京都三條御幸町の旅宿松屋にて」書かれたものである。十日再び大阪に戻り、心齋橋筋北久寶寺町丸屋善藏方に止宿した(續全集第六卷六二〇頁)。蓋し早矢仕有的と同道であつたから、丸善の大阪支店に逗留することになつたのであらう。

五月中旬頃中津に行き市學校の視察を遂げ、豫ねて東京移住を相談してゐた親戚の中上川服部の一族の中津引拂のことに關り合つてゐるうちに、奥平一家が残らず東京移住と決し、俄かに多人數の一行となり、七月六日に中津を出發し、翌日下關に着いた。福澤は、前回の中津行に於ける暗殺の危険に鑑みて、藩主一族を悉く東京に移住せしめることに決したのに對し、守舊士族等の憤激を慮つて、夜中ひそかに船を脱して途中まで陸行したのであるが、前回とは違ひ今回は何の不穩の企もなかつたので、折角の警戒が無意味であつたことが、後になつて判明した(「福翁自傳」)。

下關から蒸汽船に乗り十一日神戸着、十五日アメリカ船に搭じて神戸を出發、東京へ歸つてみると、旅行不在中に豫ねて手配しておいた慶應義塾の地所拂下のことゝが濟んでゐた。それと同時に舊持主の元島原藩主松平忠和から、三田屋敷譲り渡しの掛け合ひが來てゐて(續全集第六卷五二九—三〇頁)、福澤は塾監莊田平五郎と共に、この交渉を謝絶する一方、俄かに多人數の中津人の移轉により、その住居を割り振りするの忙しく、或は借家を探し或は奥平一家の假住居

を塾内に設けるといふ有様であつた（同上書九二三頁）。

著述家出版業者としての福澤

福澤が、著述家として極めて透力の強かつた人であつたことは、今さらいふまでもないことであるが、その一方に於て、彼は自著の發行部數の極めて多いことに着目し、自著の出版自營を企圖し、しかも見事な成功を収めた。

福澤が新しい學問を修めた知識人による商賣の可能性を見透してゐたことは、明治二年一月門下の醫師早矢有的に勸めて横濱に洋書洋藥の輸入商社丸屋善八を開業せしめたのでも知られる。實に丸善の創業當時に於ては、福澤はこの店を自分の商賣の機關であるかの如く熱心に肩を入れてゐたのであつて、三田藩からの洋書西洋器械類の購入依頼も、すべて丸善に取扱はしめて居り（書翰第一一三）、また友人に丸善商社に加入することを勧誘したことも再々あり（續全集第六卷五〇九、六一九頁）、明治五年の中津行の歸途、神戸から大阪の丸屋善藏宛に差出した手紙には次のやうな文言を記してゐる。

其後御店の商賣は如何、御様子相何度、藥品が賣れるか、原書が賣れるか、翻譯書が賣れるか、譯書は注文の通り東京より相廻り候哉、當時差向注文の品有之候哉、私歸宅の上相廻し可申、四月より七月益までの間に翻譯書の賣捌大凡何程に候哉、譯書に限らず、大阪出店の商賣は彌以繁昌の見込有之候哉、店の人數に不足は無之候哉、相伺度候（「丸善社史」一六頁）

この文面はどう見ても商社中の一員としての立場で物を言つてゐるとしか見えない。福澤は新しい知識人が、學業を

卒へて政府の官吏となり學校の教員となり、碌々たる月給に甘んじてゐるより、思ひ切つて商賣に従事することを頻りに勧め、

或は商法は素人學者にむつかしと云ふ者あれども大なるミステイキなり。その所謂世間の商人は我輩の目を以て見るに眞の商人にはあらず。世の中に封建世祿も既に潰れたり。この潰れは獨り大名のみにあらず、大名杯へ關係せる大商も共に潰るべき理にあらずや。鴻の池加嶋屋の滅亡近きにあり、我文學の社中これに代らざるべからず。十年の辛抱と思ひ、儉約して勉強を主とし、僅かに一家の活計のみにて満足いたし、月給の大利を思切るやういたし度事に御座候(續全集第六卷六二〇頁)

と、門下の一人を鼓舞激勵したこともある。また自分自身でも出版業を經營するに當り、「福澤屋諭吉」と名乗つて、書物問屋組合に加入し、自著の賣捌きに當つても、著述の内容に關しては著述家としての立場で物をいひながら、販賣の面では

世かい國つくし開版仕候に付、壹部拜呈仕候。御閑暇の節御一覽も被成下候はゞ難有奉存候。此書も御入用に御座候はゞ御注文被下度、部數に従ひ價を折し可申奉存候(書翰第二)

といふやうに、商人としての立場で物をいひ、勘定書にも福澤屋諭吉と署名してゐる。しかもこの「商人」は、從來の商賣人の因習による弊風を打破する考で、正當なる取引に關する正當なる割引はするけれども、賣買當事者の中間に介在して不當な利得を貪る俗吏のいはゆる「役得」の存在を許さず、勘定書を直接に藩主に宛てゝ送り、先づ藩主に正確なる數字を知らしめて、これを勘定方に廻附せしめるといふ、大膽卒直な商賣をやつてゐる。

舊習に戻り禮を失するに似たれとも、無益の手續を省き有害の間違を防がん爲め、態と御直に勘定書を奉入御覽候。不惡御承引被成下候様奉願候。

先般も信州邊の一諸侯、横濱にて外國品相調候節、此より彼に命し、甲より乙に托し、乙より丙に頼み、三手四手五手を経て、結局其物は粗にして其價は原價一陪余に相成候よし、慥に承及候。大名の舊惡習慣、如何ともすべからず（書翰第四）

いはゆる舊商人の公然の秘密を、敢然として排除しようといふ意氣込である。新時代に於ける新商賣は、公明正大にして且つ敏速でなければならぬ。明治五年二月に起つた運送荷物延着の損害請求の一件の如きは、彼らしいやり方で舊商賣に慣れてゐる者へ頂門の一針を與えようとの氣組が窺はれる。

ナント日本商人の頼甲斐なきこと役に立たざること、斯る有様にては迎も運送の商賣は行れ不申（書翰一二）と痛歎し、六百五十兩の品物の運送に二ヶ月の延着を生じたのであるから、品物は完全であるが、その間の金利を支拂ふべきであると掛合つてゐる。

福澤はかういふ掛合事や訴訟事件などに關係して、強權者に對して正理を主張して飽くまでも争ふといふことは、決して嫌ひではなかつた。いはゆる「泣く子と地頭には勝たれぬ」とか「長いものには巻かれる」といふやうな東洋的沒法子觀念は、福澤に於ては醜陋そのもので、我に正しき道理あらば相手をえらばずこれと闘ふことを辭さなかつた。自著の偽版に關し奸黠な出版屋を摘發したのは勿論、惡意なき府縣廳などの偽版に對しても、徹底的に追究して遁竄の餘地なからしめるやうなやり口や、長沼事件に關係して二十餘年の久しきに亘つて抗争を續け、遂に所期の目的を達した

ことなどは、そのよい實例であるが、明治六年八月にも、横濱近藤良薫の訴訟事件を丸善の早矢仕中村等と共に後援して非常な力の入れ方を示してゐる。

此一條に付ては社友一同大に盡したり、近藤は公事の主人、早矢仕中村は後見世話人、諭吉は筆者の役を勤め、數日の間、丸屋の二人は商賣をやすみ、私は讀書を廢し時を費し錢を失ひ、利を以て論すれば大損亡なれとも、樂亦其中に在り。此節は正院の裁判を待居候。近藤は兩三日前より箱根入湯に付、歸宅の上は左院へ持出し、氣根のあらんかぎり論ずる積りなり。時日と金を失ふは覺悟の前なれば患ふるに足らず、平日質素を守るはこんな時にかふ爲めなりと相談いたし居候。公事をするは芝居を見るよりも面白きものに御座候(書翰一四)

といつてゐる。訴訟は芝居より面白いとは、聊か極言の感じであるが、明治五年頃から書き始めた「學問のすゝめ」の筆鋒が甚だ鋭く且つ辛辣で、「此一身の自由を妨げんとする者あらば政府の官吏も憚るに足らず」(初編)と昂然と言ひ放つてゐる言葉は、正しくこの訴訟事件に於ける福澤等の態度を首肯せしめるものがある。この訴訟事件といふのは、明治初年の政商三谷三九郎が没落して、その舊財産が政府に没收せられてゐたところ、これを民間に拂下けることになり、數名の入札者中、近藤良薫が最高値に入札したのを、當局の官吏が特に意中の者に落札せしめたいため、近藤の入札を強ひて無効にしようとしたので、近藤がその不當を鳴らして官の處置に抗議し、遂に政府を相手どつて訴訟に及んだ事件である。「諭吉は筆者の役を勤め」とある通り、この抗議や訴訟の文案は福澤の筆になつたものと覺しく、當時の横濱新聞の紙上を賑はした。この事件の詳細に就ては他の機會に紹介する考であるが、茲には書翰の解説として必要な概略だけを記しておくにとどめる。なほこの事件については東大明治文庫の西田長壽氏の示教によつて明らかになつ

た。こゝに記して同氏の深切な調査の勞に深く謝意を表する次第である。

なほ明治三年十月「西洋事情」二篇の出版のとき、九鬼に贈つた文言は注目を要する。彼はこの頃を境として、著述上に一つの方向轉換を考へてゐたものゝやうに見受けられる。

西洋事情二篇四冊、病氣前既に脱稿、此節彫刻も出來、壬十月中旬には製本出來可申、出來の上は壹部拜呈可仕、御一覽奉願候。最早眞カタカナの翻譯もこれ切にいたし、以後は通俗平假名敷、又は片假名斗にて、漢字を不用翻譯いたし度存居候（書翰第六）

事實、「西洋事情」二篇刊行以後の出版物は、「啓蒙手習之文」「童蒙をしへ草」「かたわ娘」「改曆辨」「文字之教」「會議辨」等、大體通俗啓蒙を主とした著述が大部分で、「學問のすゝめ」も、その多くは一般民衆の啓蒙が主眼である。やゝ専門的な高級なものとしては「帳合之法」と「文明論之概略」を數へるに過ぎない。「通俗平假名敷、又は片假名斗にて、漢字を不用翻譯いたし度」といふ企圖は自家の子供たちに書き與へた平假名文「日々のをしへ」だけで（これにも少しは漢字をまじへた）、版本としては遂に實現を見なかつたが、「手習之文」や「文字之教」の如きは、漢字をできるだけ少くして日常の用を辨じ得るための教科書として編まれたもので、「文字之教」の序文には漢字制限の趣旨も述べられてゐる。

前記福山藩の援助によつて着手した國語辭典編纂の事業の如きも、將來漢字を廢し全く假名書きだけになつた曉に備へて、今のうちに國語の整理をしておきたいとの意味を、福澤が洩らしたのに對し、福山藩が援助を買つて出たといふ次第である（「福澤諭吉傳」第二卷二七一頁）。

む す び

九鬼家所傳の福澤資料は、その數は餘り多くないが、内容の豊富な點で誠に珍重すべきもので、以上私の興味を惹いた點だけに就いて匆々に解説を加へた。思ふに九鬼家關係では、その家臣白洲退藏、川本幸民、九鬼隆一なども、書翰の往復があつたに違ひない。これらの資料が発見されれば、更に一層面白いものが含まれてゐるであらうと思はれる。その出現を期待して已まない次第である。